
国 際 健 康 開 発 *I H D*

特定非営利活動法人(NPO)会報 8号 2012年9月

海外からの留学生の動向

牛島廣治

ushijima-hiroshi@jcom.home.ne.jp

第8号を発刊するにあたり、このNPO国際健康開発の発足に関係した東京大学大学院医学系研究科の1995年から～2010年ごろまでの外国人留学生の最近の動向について私が把握する限りで報告させていただきます。個人情報でもありますので紙面上では簡単に記載します。呉 裁喜(国内大学職員)、顧 艶紅(国内研究所 上級研究員)、Adhikary Arun Kumar(バングラデシュ 大学職員)、Wang Quihong・王 秋紅(米国 大学職員)、孔 麗娟(国内)、Zhou YuMei・周玉梅(米国 大学職員)、Doan Thi Phuon Lan(米国)、Li Luibai・李 榴柏(中国 大学職員)、Huy Thien Tuan Tran(米国 大学職員)、Li Lei・李 蕾(中国 会社員)、Nguyen Tran Hien(ベトナム ユニセフ)、許 曉彬(日本 大学職員)、Tuan Anh Nguyen(ベトナム 大学職員)、Tung Gia Phan(米国 研究員)、顔 海念(日本 会社員)、吉永美咲(日本 会社員)、Hansman. Grant(ドイツ 大学職員)、Ali Moazzam(スイス WHO 職員)、Khamrin Pattara(タイ 大学職員)、Phengxay Manilay(ベトナム WHO)、李 燕・Li Yan(中国 大学職員)、Wisoot Chan-it(日本 大学研究員)、Dey Kanti Shuvra(米国 大学

研究員)、Pham Ngan Thi Kim(日本 研究員予定)、Quang Duy Trinh(日本 大学職員)。皆さんそれぞれの場所で努力されていると思います。現在、日大の方には Thongprachum Aksara(タイ 博士課程)と Tran Dinh Nguyen(ベトナム 博士課程)がおり、日々研究をしています。追加等必要な情報がありましたらご連絡ください。

奇跡の一本松を訪ねて

牛島恭子

k_ushijima@hotmail.com

7月21日の新聞に、「奇跡の一本松」に関する小さな記事が載っていた。奇跡の一本松と云うのは、2011年3月11日の東日本大震災で壊滅した高田松原に残った1本の松のことである。何度となく押し寄せる大津波に耐え、たった1本だけ残ったこの松は復興のシンボルとされ、被災地の人々に希望を与えていた。然しながら、地盤沈下によって浸み込んだ海水で塩分過多の状態となり、徐々に衰弱が進んで、人々の努力の甲斐なく枯死してしまった。陸前高田市は、一旦根本から切り倒して幹を輪切りにし、心棒を通して、元の場所に立て直すことに決めたと云う。

偶然にも記事を目にした日、奇跡の一本松を見るために東北へと向かっていたとこ

ろだった。春に大きな病を体験し、左目の視界を失ってしまった私は、完治することはないと医師に告げられても一縷の望みをもって治療を続けていたが、時折心が折れそうになっていた。そんな時期に、この松の話をもふと思い出した。大きな困難に耐え、生命の限りを尽くして生きる姿を、実際にこの目で見てみたいと思い、週末を利用して陸前高田に行くことにしたのだ。

新幹線で仙台まで出て、そこから車で2時間弱の陸前高田に到着した。海岸線から3kmほど離れたところにはプレハブの商店が立ち並び、人々が力を合わせて生活する姿があったが、沿岸部に入ると景色は一変した。壊れた建物が点在し、瓦礫の山が聳え立っていた。人家も、何もない。まさに廃墟だった。海岸近くの道で車を降りて、大きな石や木の枝をよけながら一本松まで歩くと、十数人の人々が松の周りにいた。「半年経っても、一年経っても、何も変わらないねえ。」と誰かが言うと、「何年経ってもこのままさ。他ん人達は東北のことなんて忘れちゃったんだよ。」と誰か答えて、頭を殴られたような衝撃を受けた。忘れたことなんてない。出来る範囲でずっと支援してきたつもりだった。これまで、日本中そして世界中から集まった寄付はどこへ消えたのか。町は再生されていない。人々は日常生活を取り戻していない。

一年半、私達は何をしてきたのだろうか。

寝る場所と食べ物を与えられれば人間は生きられるというのは間違いだと思う。ひととつながり、社会とつながることによって、人間は自分の存在を肯定できるのではないだろうか。家族を、友人を、仕事を失って、誰からも必要とされないような状態

のままで生きられる筈がない。東京に帰り着くまでの間、これから何ができるのかを考え、モノ作りをしながら被災地の復興支援活動を行っている団体をビジネスの面でも支援することを思いついた。

奇跡の一本松は、中秋の名月を迎える前の9月12日に切り倒され、保存のための加工作業が行われる予定となっている。再び復興のシンボルとして戻ってきて、腕き苦しみなながらも前へと進む私達を見守ってほしいと思う。(2012.9.11)



写真1 あちらこちらに存在する瓦礫の山



写真2 被災状況を話している行政関係者と思われる方々



写真 3 奇跡の一本松



写真 4 高田松原の今の姿



写真 5 廃屋と壊れた車

インドネシアでの人との出会い（その 2）

江下優樹

yeshita@oita-u.ac.jp

今年の 6 月にタイ国でデング熱調査を実施している途中で、インドネシア国に急きょ出かけることになりました。インドネシア国マナド市の S 大学医学部の J 先生の学位論文口頭試験があるので、審査委員の一人として、その委員会に出席する事になりました。J 先生の学位論文の内容がマラリア原虫を媒介する蚊の研究でしたので、今から 4 年程前に、日本の T 大の研究所で寄生虫学の研究をされている故 W 先生から J 先生の研究サポートを頼まれたのがきっかけでした。

タイ国に出張中に、バンコクからシンガポール経由でインドネシア国マナド市へ飛行機乗り継ぎでかけるのは不安もありましたが、いずれの空港も何度か利用していますので、今回だけは余り不安にも思いませんでした。バンコクに宿泊する際は、大学の学生寮に泊まるのですが、今回は満室

で部屋がとれなくて、バンコク市内から空港までリンクしている電車の駅近くにホテルをたまたま予約していましたので、初めての乗車でしたが安心しました。電車には普通と急行があり、ラッシュ時には普通が混む可能性がありましたので、急行によって空港まで行きました。急行はガラ空きでしたので寂しいほどでした。

バンコクからシンガポールのチャンギ空港内では、パスポートコントロールを通過して入国しなくても、空港内にトランジットホテルがあり、そこで、6 時間ほど仮眠しました。朝は、目覚まし代わりに電話を予約していましたので、ゆっくりと休めました。

翌日、シンガポール空港からマナドに向かって、シルク航空の飛行機に搭乗しました。マナドのサムラトランギ空港では、J 先生が迎えにきていて、まずはホテルまで行きました。今回のマナド訪問は、学位審査会への出席でしたので、当日の会食は審査会の事前打合せの時間となりました。また、日曜日にも、打合せを行い、準備万端整えて、学位審査会に望みました。

日本国内の学位論文審査会では、主査 1 名、副査 2 名、そして関係者が出席して、学位申請者が約 30 分間、パワーポイントを使用して発表を行い、その後質疑応答となるのが普通です。インドネシアでも同じような流れですが、審査員の数、長時間の質疑応答など、日本とは異なりました。

当日の審査会場は、医学部本館で広い会議場が使用されました。審査委員は、私を含めて 12 名が、演者をコの字型で取り囲む形でした。審査会が始まる前に国歌斉唱があり、J 先生は、その後から、研究内容の

説明（写真 1）、それにつづく質疑応答が終わるまで、ずっとたちっぱなしでした。かなりきつかったことと思います。



写真 1 パワーポイントを使用して発表

審査委員の数の多さに最初は戸惑い、どのように対応してよいかわかりませんでした。質問が席順のとおりに戻ってくるのがわかりましたので、持参したパソコンをおもむろに開いて、質問事項を確認しました。審査委員会はインドネシア語でおこなわれました。

実は、インドネシア語で審査会を行う事が事前にわかっていましたので、インドネシア語のにわか勉強をしてもボロがすぐ出る。いろいろと考えをめぐらせていたところ、インドネシア語に堪能な日本人の I 先生が、たまたまお母様と一緒に個人旅行をマナドへされることを知りました。

I 先生とは現在進行中の日本学術振興会の Core to Core Program に参加しているメンバーでもあり、審査会の通訳をお願いしましたところ、引き受けていただきましたので、安心しました。

また審査会の話にもどりますと、学位申請者の審査時間は 1 時間程だと思いました。しかし、審査委員が 12 名もいたために、質

疑応答は、なんと 3 時間以上かかりました。審査委員一人あたり 15 分ほどとそんなに長い時間ではありませんが、審査委員の多さが影響したようです。学位申請者の J 先生はこの間たちっぱなしでしたので（写真 2）、さぞ疲れたのではないかと思います。



写真 2 質疑応答中

質疑応答が終わった後、審査委員は別室で合否判定の会議を行いました。研究内容のみならず、過去に関連の論文を書いたことがあるかとか、いろんな質疑がおこなわれ、15 分後には審査会が再開され、J 先生は合格と判定されました（写真 3）。これを聞いて、ホッとして、インドネシアまできたかい良かったと思いました。



写真 3 最終審査会に合格後、大学の正装を着た姿

後日、J 先生から、今年の暮れから学位制度が変わり、国際誌にアクセプトされた論文別刷の内容をもって、学位論文の審査がされる予定だと聞きました。この流れが世界的な流れなのでそのようにするのかなと思いました。ちなみに J 先生はかなり分厚い冊子体の原稿を製本して委員会に提出していました。1 つのデータを得て、それらを積み重ねて 1 つの表が作られていることが、インドネシア語でかかれていても、理解できますので、冊子体は冊子体で良い面もあるのかなと今更ながら思いました。

今年の 9 月下旬にはマナドで感染症の実験講習会を行う予定です。そのメンバーの一人として私も参加予定にしていますので、状況をお知らせする機会もあるかと思っています。

黒目川辺を歩いて

牛島廣治

黒目川と聞いてもどこにある川かご存じない方が多いと思います。目黒川の間違い？どうしてこの川辺を歩くことにしたのかまず話します。この川の源が自宅近く（東京西部）にある小平霊園であること、この川の源から最終地点のほぼ真ん中にある堀ノ内病院の小児科へ2011年4月から延べ週2日半勤務するようになったことが大きな原因です。偶然にこの2つがわかったこととこの川を歩こうという魅力があったからです。小平霊園は私の散歩の場所で良く行くところです。美空ひばりの「川の流れのように」という素晴らしい曲、そして人生をそこに託すということも歩く切っ掛けになりました。

この川は小平霊園のみならず、他のところからの川が合流して大きくなり荒川に流れ込んでします。また、川の中から泡が出ているように湧水も川の水に加わります。感染症研究所からの付き合いがあり、時に一緒に歩いていた博学家の内田さんと世間話（これは多くは医学関係ですが）をしながら歩くこととしました。起点の小平霊園から最終地点の荒川付近まで4回に分けて歩くこととしました。1回目は2011年5月に小平霊園から稲荷橋まで約2時間歩きました。小平霊園の武蔵野を思わせる樹林の中の窪みから始まり、暗渠が新青梅街道を地下で横切ると今まで見えなかった水の流れが細々と見えるようになります。畑の傍、団地の傍、縄文時代の遺跡の場所などを通り過ぎながら進みます。5月でつつじ、山吹が咲いていました。川にはサギがおり、

またコイなどが泳いでいました。稲荷橋は、堀ノ内病院と小平の中間地点ぐらいです。近くには、大雨の時川が氾濫しないように地下に水を一時的にためる余水路がありました。2回目は2012年3月始めに西武池袋線東久留米駅で降り、稲荷橋から馬喰橋（堀ノ内病院のそば）まで歩きました。落合川という黒目川と同じくらいの川と合流します。桜の花が咲き始め、梅もまだ残っている時でした。川の両側には家庭菜園などもありました。そばにコカコーラの工場など大きな工場がありました。3回目は2012年4月で朝霞台から新河岸川との合流地点まで、内田さん、Aksaraさん、Pattaraさんと歩きました。丁度桜の満開の時で花見が土手で行われていました。朝霞台のところまで来ると川幅も広く両方の土手の間の幅は10mぐらいあったように思います。曲がりくねって流れていきます。新河岸川の近くには、家が建っている中洲もあります。両方の川の合流近くはさらに川幅が広く、水門が合流する荒川の近くにありました。この下流近くにくると人家は少なくなり、土手から遠くに東京と埼玉を結ぶ立橋が見えました。土手にはタンポポ、土筆が咲いていました。のどかな春の光景が見られました。4回目は最後のコースで朝霞台から堀ノ内病院近くの馬喰橋までです。今回だけはぼつりぼつりと雨に見舞われました。風も少しありました。昼間は暑い夏です。このくらいの天候が良いのかも知れません。土手を、時には草ぼうぼうの中を分け入って進みました。関越道路の下をくぐります。曲がった川辺を歩いて、最終的には新座墓苑、堀ノ内病院のそばを通ります。このころには雨もやみ、暑い夏の日差しに

戻りました。

黒目川に沿った歩きは自己満足で終わりました。東京と言うと大都会の印象がありますが東京郊外での散歩をし、まだ緑が多い豊かな景色を見ました。小平は玉川上水が丁度反対側に流れておりここも散歩するには良いところです。佐賀出身の私ですが、ここで栗、梨、ブドウ、ブルーベリーなど果物の木の成長を見ることができました。次回にこの周辺に関係する古代から現在までの簡単な歴史および、外国特に韓国からの渡来との関係、国際的なことでのこの会報にふさわしい内容に触れさせていただきたいと思います。(この文章を書いている次号の事は博識家の内田さんが書いてくれそうなメールが来ました。完結するためにはお待ちください)

あとがき

高校時代まで九州で育った私は、その後東京に上京した際に醤油味のうどんとラー

メンを食べることが出来ませんでした。しかし、20年以上住んだ東京を離れて、再度九州で生活していると、今度は東京の醤油味の麺類を無性に食べたいことがあります。食文化の違いは、同じ国でも実感されることが多々あります。国が違えば更に文化の違いは大きいかも知れません。ゆっくりと時間をかけてお互いが少し歩み寄れば、両者の理解も自然と深まるように思われます。

特定非営利活動法人(NPO) 国際健康開発会報は今回の発行で8号となります。御寄稿して下さいました皆様にお礼を申し上げます。あと少しで10号になりますので、記念号の発行を企画できればと思います。そのためにも、少しずつ寄稿される皆様の数を増やしたいところです。皆様からの御寄稿を気長にお待ちしています。

なお、本会報は、ウェブでも

(<http://square.umin.ac.jp/boshiken/>)

閲覧出来ます。多くの皆様にご一読願えれば幸いです(YE)。